様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究（ｽﾀｰﾄｱｯﾌﾟ）
研究期間：2007～2008
課題番号：19820005
研究課題名（和文）曲亭馬琴を中心とする読本の研究、及び劇作界・演劇界・出版界の交流に関する研究
研究課題名（英文）A Study of Yomihon mainly on Kyokutei Bakin,and a study about the Interactions between Gesaku,the Theater and the Publishers

研究代表者
大屋　多詠子　（OYA TAEKO）
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：50451779

研究成果の概要：
読本演劇化作品について調査をすすめ、特に山東京伝の読本の演劇化作品の分析とその上演状況、またこの上演が曲亭馬琴に与えた影響について考察した論文を発表した。また馬琴と交流のあった上方の版元河内屋太助の出版活動について、特に読本と根本（歌舞伎台帳を出版したもの）の出版に注目し、その活動が読本作者に与えた影響を考察し、口頭発表を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	1,200,000	0	1,200,000
20 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	360,000	2,760,000

研究分野：日本近世文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学・読本・戯作・演劇・出版

１．研究開始当初の背景

報告者は、曲亭馬琴の読本における演劇の利用方法の特色と意味、また馬琴作品を中心とした読本の浄瑠璃化・歌舞伎化の動向と、読本と演劇の相互交流の様相を解明するための研究を続けてきた。馬琴読本の作品理解には、読本研究において主流であった中国白話小説等の典拠論に加えて、演劇・出版を含めた当代文化のなかで生まれた読本というジャンルの意義を確認することが必要不可欠であると考えたためである。

馬琴読本には演劇が摂取されているものが多いが、一方で馬琴自身はその序跋で読本における演劇の摂取について否定的な姿勢を示している。従来その矛盾については指摘されながらも、序跋の表白は建前に過ぎないという見解が主流で、重要視されてこなかった。しかし、報告者は、馬琴のその姿勢は、読本に演劇を無批判に取り入れるべきではないという考えによるものであり、その点に

読本というジャンルの特殊性を見出していたためと考える。その具体的な様相を明らかにするためにも、和漢の古典のみならず、当代の演劇と読本の関係を論じることは重要であると考える。

このような視点から報告者は、本研究開始以前において、演劇との係わりから馬琴読本の作品分析を行い、馬琴の小説観を明らかにすることに努めてきた。また当時、馬琴がどのように評価され、どのように受容されていたかを知る手段として、読本演劇化作品に注目した。それによって馬琴読本の特徴を再確認するとともに、江戸・上方の演劇界・出版界と連携した戯作界の当時の状況の一端を明らかにすることができた。

報告者は、一貫して作者の立場からその創作意識を明らかにすることを主眼に、演劇との係わりに注目してきたが、ここに至って、読本作者を取り巻く創作環境を知る上で、演劇界・出版界の立場から当時の動向の全容を把握する必要性を認識し、本研究を計画した。

２．研究の目的

以上のような背景をふまえ、本研究では、主に以下の二点を明らかにすることを目的とした。

（１）馬琴をはじめとする作者の読本が演劇界においてどのように受容され、その影響がどのように戯作界に還元されたかを把握する。

（２）当時の演劇界の状況と、演劇化作品を刊行した上方書肆の出版活動を明らかにすることで、演劇界・出版界の状況や思惑と、読本作者の創作態度がどのように関係しているかを明らかにする。

３．研究の方法

研究を進める上で、具体的には、以下の方法を取った。２の「研究の目的」で挙げた各項目について述べる。

（１）

①馬琴をはじめとする同時期の読本作者の創作方法の特徴を、演劇の利用方法に注目して、明らかにする。その際、特に演劇化作品のある読本作者に注目し、それぞれの演劇化作品との比較をも視野に入れる。演劇化作品における読本の利用方法と照らし合わせることで、読本における演劇の利用方法の特徴を、より明確に捉えることができる。この作業によって、馬琴読本独自の新たな特徴を浮き彫りにする。

②読本演劇化作品から戯作界に還元された影響を探る。作業としては演劇化作品の影響を受けた、馬琴作の読本・草双紙作品を中心に調査、詳細な作品分析を行う。それによって、読本執筆に対し確固たる創作理念を持った馬琴が、当時の読本演劇化の流行をどのように捉えていたかを明らかにすることができる。また演劇化作品の読本作者の創作活動への影響を通して、当時の読者層・観客層による演劇化作品の受容の様相をうかがい知ることができる。さらに読本演劇化の反響に即応し、読本作者・戯作者に働きかけて演劇化作品を再利用した作品を刊行した江戸書肆らの当時の動向を追うことが可能になる。

③馬琴読本をはじめとする読本の浄瑠璃化作品の作者であり、また読本作者でもある佐藤魚丸の創作活動を、拙稿を補う形で、作品分析や演劇資料を渉猟して明らかにする。佐藤魚丸の読本と浄瑠璃の創作方法における共通点・相違点を探ることは、読本というジャンルの独自性を考える上でも重要である。また、読本の浄瑠璃化に到る当時の背景を知ることができる。読本作者かつ浄瑠璃作者である佐藤魚丸の創作活動について、作品分析や演劇資料を渉猟して明らかにする。

（２）

①演劇側の先行研究を補訂する形で、読本演

劇化作品について調査を行い、上方・江戸の演劇界における読本の受容の様相を把握する。作業としては、『歌舞伎年表』（岩波書店）の外題・大筋・役名などの記載から、読本演劇化作品に見当を付けた上で、実際に上演台帳や番付の調査を経て確定してゆく。

②上方書肆、河内屋太助による絵入根本出版の全容を明らかにすることで、読本出版と演劇化作品出版の両側面を担った上方出版界の動向を把握する。上方の書肆、河内屋太助は、馬琴読本を出版している書肆であるが、一方で、役者評判記の版元でもあり、絵入根本の刊行も多い。河内屋太助については、役者評判記の出版活動等の面からの研究は進んでいるが、読本演劇化作品の絵入根本についてはほとんど研究がない。読本というジャンルの特性を考える上でも、読本に近似する様式を持つ絵入根本についての調査は意義がある。

③歌舞伎俳優と読本演劇化の関係を、上方の演劇資料から調査する。馬琴読本を贔屓にしていたという俳優、二代目嵐吉三郎が文化期のほとんどの馬琴読本の演劇化作品に関わっていた事実がある。嵐吉三郎を中心とする歌舞伎俳優と読本演劇化の係わりを調査する。

４．研究成果

研究成果について、３の「研究の方法」で挙げた各項目について述べる。

（１）

①　特に山東京伝の読本『昔話稲妻表紙』（文化三年十二月刊）に注目した。『昔話稲妻表紙』は文化五年の正月に大坂の角の芝居「けいせい輝艸紙」と中の芝居の「けいせい品評林」と、両座で歌舞伎化されている。

台帳の残らない「けいせい輝艸紙」については、絵尽しから内容を再構成し、「けいせい品評林」については台帳の諸本調査を行い、その内容を確認した。

また「けいせい輝艸紙」が後世に伝わらず、「けいせい品評林」は伝わったことの理由を内容比較から再確認した。

さらに読本と両作品の検討を通して、原作の『昔話稲妻表紙』の特徴を検討した。特に台帳が残る「けいせい品評林」を取りあげ、原作の因果律が歌舞伎化に際して排除されていることを確認した。

②　①の調査の関連で、『昔話稲妻表紙』の歌舞伎化の好評が京伝・馬琴に与えた影響を確認した。その好評の背景には、（２）の③と係わるが、両座の競演は、当時の二代目嵐吉三郎と三代目中村歌右衛門が人気を二分する両俳優が両座に出演、対抗したことがある。

またこの競演の後、歌右衛門は江戸に下向、江戸ではその下向にそれが戯作に大坂に残った吉三郎は馬琴読本の歌舞伎化のすべてに係わることになることを再確認した。

京伝は、この好評を受け、続編『本朝酔菩提全伝』において「けいせい輝艸紙」「けいせい品評林」の番付を掲載するなどしているこがは知られているが、同時期、演劇種の読本を執筆している馬琴もまた『昔話稲妻表紙』と共通する趣向を、自身の読本で繰り返し用いていることを指摘し、『昔話稲妻表紙』の歌舞伎化の好評が馬琴に与えた直接・間接的な影響の可能性について考察した。

これらの①②の成果の一部については、論文「『昔話稲妻表紙』の歌舞伎化と曲亭馬琴」で報告した。まだ未発表の成果については、今後引き続き、報告する予定である。

③　佐藤魚丸については、本研究の認可直前に「読本作者魚丸」（『国語と国文学』、東京大学国語国文学会、84 巻 12 号、1009 号、pp51-63、平成 19（2007）年 12 月）として中間報告をしたが、その後、調査を

続行、補うべく資料を収集した。

（２）

① 現在も調査続行中であるが、先行研究をまとめ、資料調査を通じて、各作品を確認、検討、文化期における読本演劇化年表稿を準備している。

② 河内屋太助版の絵入根本（歌舞伎台帳を刊行したもの）の出版の全容を知るために、各所蔵機関の諸本の書誌調査を行った。

河内屋太助は、絵入根本のみならず、馬琴をはじめとする読本の刊行も手がけている。読本と近似する様式に注目し、「絵入根本」という呼称とその様式が試行を経て、次第に確定してゆく様相を確認し、絵本読本、江戸読本の様式との影響関係について考察した。

③ （１）③の読本作者であり、浄瑠璃作者である佐藤魚丸は丸派の狂歌師でもあり、拙稿でも確認したが、丸派の狂歌師と二代目嵐吉三郎との間に交流があったことが既に先行研究によって指摘されている。

（２）②の調査を通して、河内屋太助は丸派の狂歌師の著作を刊行するほか、丸派の狂歌師が河内屋太助版の絵入根本に序を寄せていることを確認し得た。馬琴読本の出版元である河内屋太助と丸派を介して、馬琴読本の浄瑠璃化作者である佐藤魚丸と、馬琴読本の演劇化に係わった嵐吉三郎、ひいては読本作者ともつながりが存在し、直接的・間接的に、読本の演劇化に相互影響があった可能性について考察した。

②、③については、申請時にも述べたように本研究と密接に関わる、科研費基盤研究 B「近世後期江戸・上方小説における相互交流の研究」共同研究会（平成 20（2008）年 8 月。於国文学研究資料館）において、成果の一部を「絵入根本と読本の演劇化－河内屋太助と嵐吉三郎を中心に－」と題して口頭発表した。

①②③のこの研究成果については、今後、引き続き報告する予定である。

また当初の計画とは別に、本研究の途上で、従来あまり取りあげられることのなかった馬琴自身が名付けた名「解」の由来、意味についての考察を深め、「馬琴と蟹」という論文を執筆した。

以上、本研究では、ほぼ申請書の予定通り、すべての調査について研究を進め、一年半という短い期間ではあるが、口頭発表一回、論文二本という成果を挙げた。また未発表の成果についても、平成二十一年度以降、引き続き報告する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
① 大屋多詠子、「『昔話稲妻表紙』の歌舞伎化と曲亭馬琴」、『江戸文学』、40 号、pp87-91、2009、査読無。

② 大屋多詠子、「馬琴と蟹」、『青山語文』、39 号、pp37-48、2009、査読無。

〔学会発表〕（計　１件）
① 大屋多詠子「絵入根本と読本の演劇化－河内屋太助と嵐吉三郎を中心に－」、平成 20（2008）年 8 月。科研費基盤研究 B「近世後期江戸・上方小説における相互交流の研究」共同研究会、於国文学研究資料館。

６．研究組織
(1)研究代表者
大屋　多詠子（OYA TAEKO）
青山学院大学・文学部・准教授
研究者番号：５０４５１７７９

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし